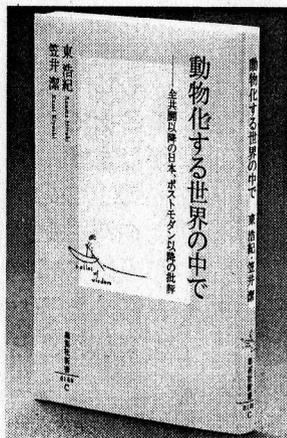


「動物化する世界の中で」

東 浩紀、笠井 潔著



ウェブサイトで十六信にわたってやりとりされたこの対談を読み終えて感じることは、異世代と「会話」することの困難さが近年ますます増してきているのではないかといいことだ。一九四八年生まれの笠井に対し、東は七一年。論点はかみあわず両者はしばしばすれちがい混乱する。だが何かそこに、現代がぐぐらねばならぬ課題があるようにも思えてくる。

東によれば、人間だけが「他者の欲望を自分の欲望にする」という複雑な構造をもっている。相手がより幸せになることを欲している状態が、己の欲望ともなるわけだ。そのような、いわば他者を自己の中へ取り入れる人間本来の「欲望」が、動物的な「欲求」とってかわられつつある。あたかも空腹を覚えた動物が食べるように、完全には満足してしまえるような。そこでは他者の存在は消え、各人が外への回路を閉じ、自己中心で安穩な日常が広

他者の存在消す新たな課題

がっていく。それが「人間」の「動物化」だ。たとえば「九・一一以降」をめぐる議論でも、「戦争」を歴史的にひもとき、あくまで観念的に追究しようとする笠井に対し、東はあっさり、戦争が「セキュリティ」の中へ溶解してしまったと言いきる。安全で不安をいだかない「動物的」な暮らしを実現するための戦争にとって、大統領がどんなことを口走ろうが、国家がどんなイデオロギーで戦おうが、大きな問題でなくなってしまう。

そんな両者の対立は、八〇年代の分析で、さらに激化する。サブカルチャーが巷にあふれたその年代が、マルクス主義を十分に精算しないまま誕生したとする笠井に、東は、高校生のある天皇が崩御し、皇居前を訪れたが記帳台の手前で記帳せず帰った過去をふり返る。そしてそこに、天皇の死さえもドラマ化し消費しようとしていた自己の姿をよみとろうとする。

こうして幾度となく座礁する対論は「会話の可能性」というテーマも二次的に提起している。おそらくそこにこそ「動物化」された人間としての新たな課題があるのかもしれない。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

集英社新書・900E

- ◇あずま・ひろき 1971年生まれ。著書に「動物化するポストモダン」など。
- ◇かさい・きよし 1948年生まれ。98年「本格ミステリの現在」（編著）で日本推理作家協会賞を受賞。